

CNAC 第9回全国フォーラム

子どもたちに美しい海を引き継ぐために IN 三河

日時:平成 27 年 1 月 17 日(土) 13:30~17:30

場所:豊橋市民センター(カリオンビル)6 階 多目的ホール(愛知県豊橋市松葉町二丁目 63 番地)

主催:NPO 法人 海に学ぶ体験活動協議会

後援:国土交通省港湾局 国土交通省中部地方整備局 豊橋市 一般財団法人みなと総合研究財団

協力:環境ボランティアサークル亀の子隊

■開会の挨拶

スピーカー:NPO 法人 海に学ぶ体験活動協議会 代表理事 三好 利和

このフォーラムは東京近郊での開催が多い中、今回は豊橋での開催となった。開催にあたり、豊橋市及び国土交通省中部地方整備局の多大なる協力を感謝している。CNAC は、子どもから大人までがもっともっと海に出かける環境づくりをすべく、海に関わる自然体験活動の普及を目指している。今回は、地元三河湾での活動事例の他に大阪湾で活動している団体に事例報告をしてもらう。それをより多くの人に情報を発信、普及することが重要だと考えている。今日 1 月 17 日は阪神淡路大震災からちょうど 20 年目の日。自然体験活動で得たコミュニケーション能力が大きな力となり、東日本大震災でも体験活動で学んだことや、その指導者がボランティアで活躍した。子どもたちに豊かな海を引き継ぐのは大人の命題でもあり、島国日本の社会がより良くなると考えている。今回のフォーラムを通して一人一人が、子どもたちに豊かな海を引き継ぐには何をしたらよいか考える、またアクションを起こすきっかけにしたい。

■来賓挨拶1

スピーカー:国土交通省 港湾局 海洋・環境課長 小谷野 喜二様

自然に触れ合う機会が減っていく中、四方を海に囲まれた日本にとって、次世代の人たちに環境・海・港を感じてもらうには体験してもらうことが一番である。国土交通省港湾局では「海辺の自然学校」と称して、海辺の自然を楽しみながら港や海洋に関する理解を深めてもらうため、小中学校の教育機関や NPO 団体と連携して海辺の環境学習プログラムを平成14年から実施している。また、三河湾では、NPO 団体と連携して干潟・浅場の環境学習や水質調査を実施していて、今後も継続して国民の海洋環境に関する理解を深めていくと共に、美しい海を次の世代につなげていくことを期待している。最後に、本フォーラムをきっかけに、それぞれの団体で活動をしている皆様の益々発展することを願う。

■来賓挨拶2

スピーカー:豊橋市 環境部長 大須賀 俊裕様

第9回全国フォーラムがこのように盛大に開催され、かつ豊橋で開催されることに大変感謝している。また、CNAC や国交省、地元 NPO 団体の活発な議論は本市にとっても大変有意義であり大いに期待し

ている。

豊橋市は、西に三河湾、南に太平洋と海に関係が深い市である。そして、三河湾では、国交省の力添えのもと、本市をはじめ、沿岸の市町、流域の市町、愛知県などの 27 の自治体から成る「三河湾浄化推進協議会」を設立し、三河湾の浄化・再生に取り組んでいる。汐川干潟では地元住民、ボランティアが協働でゴミゼロ運動(清掃活動)をしている。

地元章南中学校では汐川干潟再生の取り組みとして、干潟の耕耘や水質浄化機能があるカキ殻を埋設し、その効果を検証するといった環境学習にも取り組んでいる。アカウミガメの保護活動もしており、CNAC の活動と通じるものがある。最後に、今回のフォーラムをきっかけに、様々な活動や施策が施され、美しい海を次世代に引き継がれることを期待している。

■来賓挨拶3

スピーカー:衆議員議員 鈴木 克昌様

蒲郡にある「生命の海科学館」は私が蒲郡市長の時に設立した施設で、46 億年前に地球が誕生し、最初に海が出来て、そこから我々の先祖が誕生したわけだが、子どもたちに海の大切さや夢を持ってもらいたいという思いで設立した。

今回のフォーラムを通じて、海のおかげで我々人間がいるということ、その海が汚れ人類にとって大変な状態になっていることを今回のフォーラムを通じて勉強し、広く海の浄化に関心を持ってもらうことを期待している。

■キーノートスピーチ

プレゼンター:鈴木 信昭さん

国道交通省 中部地方整備局 三河港湾事務所長

美しい三河湾を次世代に引き継ぐための取り組み

初めに

私は愛知県出身で知多半島の「河和」に先祖の墓があり、子供のころ、夏休みにはよく海水浴をしたり、蒲郡へ潮干狩りに連れて行ってもらったりと、三河湾には大変思い入れがあり、現職に就けたことは大変うれしく思っている。

1. 三河湾海域環境の「昔」と「今」

- ・高度経済成長期の埋め立て面積の増加と共に赤潮の発生回数も増加しており、両者には因果関係がある。
- ・平成に入り赤潮発生日数が減少しているのは、陸域の下水道整備等の効果と考えられる。
- ・埋め立てが進められてきたが、今でも三河湾内には六条干潟、一色干潟、汐川干潟、伊川津干潟などの天然干潟が数多く存在しており、多くの生物が生息する豊かな自然環境が築かれている。

- ・特に六条干潟は、アサリの稚貝が発生する多く発生する干潟であり、全国のアサリ生産の半分を担っていると言われている。
- ・愛知県水産試験場の調査では、一色干潟の浄化能力は西尾市の下水処理能力に匹敵するとも言われている。
- ・以上のことから、三河湾は物流拠点としての港と天然干潟が共存する全国でも非常に珍しい港であると言える。

2. 中山水道航路の浚渫土砂を活用した干潟・浅場造成(シーブルー事業)

- ・平成10年度～16年度には、中山水道航路を浚渫したときに発生した良質な砂を利用して、干潟・浅場を造成した。
- ・その後のモニタリング調査によると、生物相が豊かになっており、干潟生物生息をはじめ、希少生物の生息場としても機能していることが分かった。
- ・このように、造成した干潟・浅場に水質浄化機能の高い二枚貝をはじめとした生物が定着するなど、一定の効果が確認されており、人工干潟の存在価値を向上させる事例となった。
- ・一方では、依然として貧酸素水塊が発生しており、魚介類に影響を及ぼしており、干潟・浅場造成に際しては大量の土砂確保が必要であり、アサリの定着に適した性状について引き続き検証していく。

3. 三河湾の環境改善に向けた取り組み状況

- ・国土交通省中部地方整備局では、伊勢湾再生を推進するための海域での取り組みを具体化した「伊勢湾再生海域推進プログラム(以下、推進プログラムという。)」を平成20年3月に策定した。
- ・伊勢湾再生海域検討会三河湾部会は推進プログラムに位置付けられた「多様な生物が息づくうみの保全」に向け貧酸素水塊の抑制に効果が期待される方策を検討する専門部会である。
- ・三河湾部会では、昨年度までに干潟・浅場造成の候補地を設定した。今後は候補地における詳細な検討を行っていく。
- ・造成に向けてまずは実験的な干潟造成を検討しており、今後の本格的な造成のための足掛かりになることを期待している。

■活動事例① 美しい三河湾を次世代に引き継ぐための取り組み

プレゼンター:鈴木 吉春さん 環境ボランティアサークル亀の子隊 代表

はじめに

- ・普段は教員をしている。亀の子隊はきれいな海を守る心を広げる為に、「西の浜はゴミ箱じゃない！」をスローガンにして毎月一回西の浜で清掃活動をしている。また、年に数回の体験活動、海の環境を学ぶ会を開催。
- ・活動場所の渥美半島、西の浜は全長 10 キロ、伊勢湾・三河湾に挟まれて景色がとても良いところだが、その伊勢湾・三河湾から大量のごみが流れてくる場所でもある。

・亀の子隊が生まれる前から、綺麗な海を守る心を広げたいという子どもたちの思いがあった。

1. 亀の子隊の活動のはじまり(1年目)

・平成10年、学校から2キロ先の西の浜に子どもたちといった際、浜はゴミでいっぱい、子どもたちは驚き、ペットボトル、ガラス瓶などのゴミ拾いを始める。子どもたちは「処分場よりひどい」「西の浜はゴミ箱じゃない」という感想を持ち、活動が始まった。

・子どもたちの活動を学びに変えていくため、まず、地域の人たちの思いを聞く。渡会さんに西の浜の昔の話聞く。1)生活にとってとても大事な場だった。2)海は綺麗だった。スナメリ、鯨も泳いでいた。とてもきれいだったんだな、絶対きれいにして昼寝をしようと思った、と子どもたちが感想を持ち、子どもたちの思いが高まる。

・ある日の活動で、岐阜県の関ヶ原の東側にある垂井(たるい)町という文字の入ったコンテナを発見する。地図を見て、このゴミはなんでここにあるんだろう、どうすれば良いんだろうと子どもたちと一緒にゴミの前で考えるようになった。

・協力も増えていく。PTAが4年生の活動を応援するため、PTA集会を開いた。また、役場の職員さんにも声をかけてくれ、この頃からゴミ袋を貰えるようになり、活動が活発化した。

2. 亀の子隊の活動(2年目)

・平成11年。5年生の子どもたちに聞くと、もっと続けてやりたいということで、学びを促進する方法を考える。そして、日曜・夏休みにもやりたいということで、日曜・夏休みにも活動を始めるようになった。

・その頃、スナメリの死体を初めて見つけ、海の生き物のためにも更に活動を活発化させたい。

・夏休みの新聞に出ていたスナメリを守る活動をしていた生物学者の林正道さんの紹介を見つける。そして、スナメリに会いたい、もっと西の浜をきれいにしたいという思いが強くなり、活動が活発化。

・浜に来る釣り客、遊びに来る観光客に活動を知ってもらうために「私たちはふるさとの海をきれいにするためにゴミを拾っています」という立て看板を立てた。

・日曜日に活動を始めたので、一般の人の参加も増える。

・月2回の日曜日の活動や夏休みの活動をボランティアの形を取ることに。10月に「環境ボランティアサークル亀の子隊」を結成した。

3. 亀の子隊の活動(3年目)

・平成12年。思いを広げる為、どうするか授業で考える。まずは学校内からということで、他学年に呼びかけをすると、低学年も参加してくれるようになった。

・4年生からきれいな海を守る心を広げる為、子どもたちはいろいろな学びをした。例えば区長さんや職員さんを授業に呼んで、願いを伝えたり、ポスターを書いて各施設に掲示をお願いした。沿岸の自治体や漁協に知ってもらうために「海にゴミを捨てるのを止めましょう」と手紙を書いたりもした。すると、非常に多くの支援の物資や手紙を貰い、子どもたちのモチベーションとなった。

・「手紙作戦」では、5年生になって、川からゴミが来るということで、河口を持つ自治体に手紙を書いて送

った。船舶企業にも送った。拾ったライターに名前のあるお店に、お客さんに海に捨てないように言ってくださいと伝えた。14 人の子ども達が一人 5 通・6 通と書いた。

・6 年生も「手紙作戦」を自治体等に宛てて行った。また、看板を海に立てたり、全校集会や、学芸会でも活動発表をして新聞にも掲載されたりした。近隣の小学校にも声掛け・訴えをし、その甲斐があり、夏休みには伊良湖小学校の子たちと一緒に活動ができた。活動の輪を広げる為に、亀の子隊の HP を子どもたちと作成。一番の支援は保護者、役場だった。また、テレビ局も来て、輪を拡げて貰った。東海テレビは毎回活動に来て、1 年半追跡して報道してくれた。旧渥美町からは、ゴミをコンテナに溜めておくと、後で持って行って協力してくれた。現在の田原市も収集計量等で協力をして貰っている。

・海上保安庁に巡視船に乗せて貰って三河湾を一周した。平成 13 年頃、三河港湾事務所さんと知り合い、清掃船に載せて貰ったりいろいろ協力をして貰った。その他、豊田市矢作川研究所等多くの皆さんから支援をして貰った。

4. 亀の子隊の子どもたちの契機となった愛知万博

・環境をテーマにした愛知万博で発表をした。

その後、東三河のボランティア集会や全国各地のボランティアフェスティバルなど、いろいろなところで活動発表やパネル展示等行った。

5. 西の浜クリーンアップ活動

・亀の子隊は「西の浜クリーンアップ活動」を柱にして活動を行っている。本年度までに 210 回の活動をしてきた。本年度は既に 1,549 人が参加をしてくれている。

・二つ目の柱の「海の環境を学ぶ会」は、スナメリ観察会、磯遊びの会、スノーケリングの会、塩づくりの会、タッチングプールなど行う。

・広報活動にも力を入れている。毎回 100 件ほどの事業所に案内を送り、想いを伝えている。

・子どもたちの想いは、裸足で走れる海にしたい、昔のようなきれいな海にしたい、と。亀の子隊の子どもたちの夢であり、海の夢でもある。昔のきれいな海に戻りたいと想っているのでは。16 年間、多くの皆さんの支援をいただきながら、子どもたちの夢、海の夢を支える活動をしてきた。これからも隊員たちと、きれいな海を守る心を広げるためのプロジェクトをこれからも進めていきたい。

■活動事例② 子どもと海に行こう

プレゼンター:永田 桂子さん NPO シーブリーズ三河湾 代表

1. 今の子どもたちを取り巻く環境

・今の子ども達は、学校、家庭、塾またはクラブチームの 3 つの中だけでぐるぐる回って生活している。学校と家庭、そして塾またはクラブチームの力加減が非常に大きく差が生まれだしている。特に学校に関しては、本当に子どもたちのために一生懸命動いてくれる先生というのが今学校では少なくなっていると感じている。特に、ゲームで育ち、体験活動などがない時代に育った世代が今教員になりつつある。そ

して、そのことで数々の社会的問題が、身の回りも含めて起きていると感じる。

・自分達が預けている子どもたちをどうやったら学校で楽しく生活してくれるようになるだろう、場を提供するものが何かないかということで、“環境チャレンジ”が始まった。そのきっかけになったのが、愛知万博。開催の年に、各市町村での環境に関する取り組みとして蒲郡市が立ち上げて始まった。

2. 環境チャレンジについて

・小学校の授業の中で子どもたちを海に連れていく。現在、蒲郡市内の沿岸域＝海を校区に持つ小学校を主として、全八校が海に行っている。2日間のカリキュラムを組んでやっている。活動期間は5月下旬から9月の第一週の大潮の日限定で、砂浜が出ているときに活動し、1時限目から6限目までずっと海のことをやっている。

・蒲郡市も私たちも全校やりたいが、真夏しか海に行くことが困難で、さらに大潮の日限定なので、8校以上増やすことが出来ない現状があり、“ジュニアシーレンジャー”の取り組みを始めた。

3. ジュニアシーレンジャー

・学校で環境チャレンジを学んだ子たちと、まったく海に触れたことのない小学校の子も達がいる、環境チャレンジを学んだ子たちにとってはステップアップの機会に、海に行ったことのない子どもたちにはお父さんお母さんを連れてきてもらうという、両方を網羅できるシステムにした。

4. 活動の目的

①目的としては、まず、海の生き物に触れて命を感じる。

子どもたちが命に触れる機会がない昨今。核家族化してきて、身内が亡くなる経験も非常に少ない。海の生き物に触れさせるとまず小さいカニが触れない、貝ですら持てない子もたくさんいる。まずそれを触らせる。すると、いろいろと触っていくうちに海の生き物は水から上げているので弱ってくる。そういったものもすべて見せる。そういうことで命なんだよということを私たち大人がちゃんと伝えていく。また、子どもたちに生きたものを調理させる。食べることを通じて、命を自分たちの体に取り込むことが生きる事なんだ、ということを引きちんと伝える。

②マリンスポーツを通じて自分の力を認識する。

海のスポーツは特に自分の力を、子どもが、こんなに力がなかったのか、とか、波に飲まれて巻かれれば、なんでできなかったんだろう、と何もこちらが教えなくても自分で感じる事が出来る。

③バーチャルな世界で生きる今の子どもたち。多くの先生が体験をしていない、いろんなことを体験していない世代の先生に切り替わりつつある今、ゲームで育った先生たちが、ゲームの世界の中にいる子どもたちに教える。すると、教科書を読むだけで終わる、教材があると教材だけを教えてそれと教科書と連携して教えない、といった問題が出てくる。活動に連れて行くときも、特に都会の子たちはバッグの中には必ずゲームが入っている。活動では、電子機器に頼ることなく、自然をとにかく肌で感じ、その中から疑問が出たことに対して解決をはかり、知識を得ることで自己判断力を高めていく、という事をしている。すると、シーレンジャーに参加している子どもたちは、例えば泊りに行くときカバンの中に懐中電灯、非常

食を持って来るなどという風が変わってきた。

④海に接して、五感をフルに活動した感動など。子ども達が本来持つべき力を少しでも引き出していく。子どもが生まれつき持っている力が、少しずつ抑え込まれていく。例えば、人間には冷たい、暑い、寒いなどいろんな感覚が備わっている。とにかく、どう？どう思う？と聞くことを繰り返してこういったものの力を付けていく。

⑤海の専門家に触れることで将来の夢を膨らます。活動当初、高校生だった子たちが今は社会人になっている。この2・3年で社会に出る時に、水産高校の教員になって戻ってきたり、伊豆大島に教員として赴任し、子ども達と海を学びたいと言ったりする。また、ゴミを拾うといろんなゴミがある。それを子どもたちに伝えるのに、まずは海際で止めるために検疫官になった子もいる。学校＋家庭＋塾 or クラブサークルの3つのサークルの中では、日ごろ大人に触れる機会がない中、海に来てもらうことで、海に接する大人たちは子どもたちにとってはきらきらとカッコよく見える。そういった方々にまずは触れてもらうこと、またそういった人たちに来てもらい職自慢をしてもらうことで将来の夢を膨らますきっかけを作る。

5. 活動について

・スタンドアップパドル(以下、SUP)に今年は取り組んでいる。蒲郡にて SUP 協会を立ち上げ、シーレンジャーに SUP マラソンレースへ参加させている。やってみて初めてわかったが、その中で当然レースに出れば優勝できる子もいればドンケツの子もいる。ドンケツで帰ってきた子が泣いて帰ってきた。「次オレ一番取る」と。初めてそういう言葉が出てきた。初めてチャレンジし、初めて大会というものに出て、初めてそういう感情が出てきた。

・ライフジャケット着用体験を必ず全員にさせている。海での活動が安全に、ということではなく、ある豊橋市内の中学校でライフジャケットを着ていたにも関わらず学校の野外活動中に一人の女生徒さんが亡くなるという事故があった。そのことを機に、ライフジャケットは着てみなければ自分の命が守れない、ということに改めて気づかされた。ライフジャケットを正しく着て脱ぐ方法までをすべて教えている。訓練の中でこういうことが起きたらこういうことをしなければいけないというところまでを教えるライフジャケットの講習会をしている。

・蒲郡の水産高校の実習船の中に泊まらせてもらい、高校生と一緒に勉強をする。実際一本釣りはできないが、その疑似体験をする。あの高校行きたいと思わせる一つの仕掛け。

・インドアでいろいろな実験をしながら、海に関するシステムを、どんな構造で波が起きるのかといったことを、大学の教授をお呼びして、大学生に通常行う授業を子ども用に置き換えてしてもらっている。

・海上保安官に実際に来てもらい、海図に航路を引くなど航海術を学んでいる。ポート免許を取る時やるような、座標などいろんな勉強をしている。

・防災という観点。私たちが海で遊ぶ以上、いつどんな時にそういったことが起きるかもわからない。三河湾に住んでいる以上、こういったことがないとも言えないので、津波の訓練をし、津波の知識を得ている。波の起きるのはどうやって起こるのか、そういった知識から実際に避難訓練をするところまでをトータルで勉強している。表浜海岸で実際にサーフィンをすることで、波の力などを体感させている。

6. 講師とともに

・活動で大事になってくるのは講師。始めは講師を育てようと考えていたが、今いる講師を発掘・活用するという考え方に。まず地元になんか海に関するところがあるか、ということで調べたところ、プロのヨットマン等、いろんな人たちがいる。そういった人たちにまず声をかけて協力をしてもらっている。一つ問題は、教えることは別の技術がいる。専門家だから教えられるかというところではない。工夫をしたり、講師力を磨く必要がある。その部分を、講師に来ていただくことでお互いに勉強をしている。

7. 子どもたちの笑顔の為に

・普段、活動中は集中していてなかなか見られない子どもたちの笑顔、今年はボランティアでカメラマンの方が写真を撮ってくれて、改めて見たときに、子ども達はこんないい顔をするんだな、と初めて気づいた。子どもが笑顔だと、それを見ている親も幸せで、子どもを海に連れてきてくれる。子どもからいろんなことをお父さん、お母さんも学んでくれたことがジュニアシーレンジャーの大事な目的の一つと感じる。

■活動事例③ 美しく豊かな伊勢湾と活力あるみなとまちの実現に向けて

プレゼンター:村上 廣さん NPO 法人伊勢湾フォーラム 理事長

はじめに

・NPO 法人伊勢湾フォーラムは、伊勢湾に関わりのある人が集まって、2004 年、今からちょうど 10 年ほど前に名古屋でスタートした。「美しく豊かな伊勢湾と活力のあるみなとまちづくりの実現」をめざすため、「水質浄化推進事業」「みなとまちづくり推進事業」「人材育成推進事業」「海洋スポーツ推進事業」を実施している。

1. 伊勢湾のごみ問題

・現在名古屋港を中心に海のごみ問題をやっている。伊勢湾には三大湾の中で唯一島があるが、佐久島などは季節風でかなりのごみの集積が見受けられる。ゴミの清掃、クリーンアップ作戦をしているが、2013 年秋、参加者 94 名のうち子どもは 52 名の参加。水質浄化推進事業の一つ。海のごみの量は伊勢湾全体では相当なものなので、全体でこういった活動をしなければと実感している。

2. 美しい海伊勢湾をめざして ～伊勢湾流域 一斉モニタリング調査等～

・水質浄化推進事業の例では、人・森・川・海の連携により、活力ある伊勢湾を再生し、次世代に継承するため、水質調査、透明度、ゴミの浮遊等々の状態を子どもたちと調査している。人・森・川・海の三位一体の中で物事を考えないといけない。

・環境工作教室。身近な環境を再発見するため、楽しみながら環境問題に取り組む為に、貝殻や海藻を使って子どもたちと工作教室を行う。名古屋を中心に伊勢湾を見ると、都市の先端部に海がある。豊橋、蒲郡、田原など三河湾は自分たちの生活の場のすぐ目の前に海がある。名古屋は港区、知多半島の海岸線以外に住んでいない、都市の中心分においては、海とは関係のない日常生活を送っている。その

中で海を理解して貰おうとすると、名古屋の港区、中川区など特定の海に接している子どもたちを中心に参加してもらう。子どもたちと海とのパイプ役として、これを名古屋市全体に、また三重県、知多半島、渥美半島などにも広げていきたい。

・名古屋港には人工干潟、環境体験教室がある。日本人は自然の恵みに感謝し、自然に生かされている。海苔の摘み取り、板海苔づくり体験などを行っている。河湾は海苔棚があるが、海苔の養殖も漁業の中では三河湾は有名。子どもたちに海苔の体験をもっとさせる機会を与えたい。

3. 人と伊勢湾の新たなふれあいをめざして ～みなとまちづくり推進事業の例～

・名古屋港においても浚渫土砂を利用した干潟の例があり、今はまだ実験段階であるが、干潟を造成し、見学会などを行っている。

・それぞれの港では工業、重工業、そして海運業等、港には人が入ってはいけないというのが港湾行政の基本的考えだった。そして、それが結果的に人と海との隔絶をしてしまった。今日、環境問題などで、港湾行政が海をなくしたという話も聞くが、土木学の中では、河川・道路・港湾が、新しい技術開発をもって、それぞれの特質を生かしながら、港湾は埋め立てをし、重工業の基地を作り、そして港の整備をしていく。そのおかげで今三河港もいろいろな車の基地としての港湾となった。

・海岸が少なくなってきたことによって、今それらを早く元に戻そうということで、少しずつ人工干潟を作りながら、そして人工干潟にはアサリの稚貝などを撒き、アサリが呼吸をすることで、かなりの水質浄化の効用が実証されている。伊勢湾とのふれあいを持ってもらうためにいかに人工干潟を作っていくかが課題である。

・伊勢湾においては、海は夏だけ。4 シーズン人工干潟に来てもらうという大きな課題がある。国でも観光事業の見直し等行っているが、ウォーターフロント、海岸線のリゾートを本州でもやった方が良く思う。

4. 人材育成事業

・貝殻工作など、身近なことで人材育成。本当の目的は、もっと子どもたち、親子で海に行き行って貰いたいということ。今、海岸はあるのに泳がせずにプールで泳がせる傾向がある。我々の頃はプールがなかったもので、海に直接行って臨海学校をしたりした。今は海がすぐそばにあってもプールで泳ぐ。もっと海洋スポーツなり、子どもたちに海に親しむような環境の人材育成をしたい。海は無限の物を与えてくれるという学習をさせたい。

・釣りは、最近大型レジャー船、釣り船で大きい物を釣りにいく傾向。テレビの影響か。もっと身近な海で釣りをやる風景が見たい。

・学習センターなど名古屋港の見学会をやって欲しいということで、伊勢湾フォーラムが中心になって活動をしている。

・伊勢湾フォーラムでは、10月に名古屋の中川運河でドラゴンボートのレース大会をしている。子ども達が非常に楽しみにしている。港湾局、企業もチームを出している。全18チーム、子どもはその中で40名ほど。会場が港湾区域内で売店等は出せないという課題もある。

- ・海、港を皆に知らしめるためにはよきリーダーが必要であり、多様性の中での人材育成が重要である。
- ・子どもと海を近づけようとしても、海と親たちが意外と遠い。学校教育というより、家庭教育が大事。
- ・海辺の安全については、子どもたちに安心して海で遊んでもらおうと思うと、親、社会、管理者の責任が問われる。これをどうクリアするか、港湾、海岸をつかさどる団体にとっての課題である。

■活動事例④ 近くて遠い大阪湾

プレゼンター:岩井 克巳さん NPO 法人環境教育技術振興会理事

はじめに

・大阪湾見守りネットは、150 人くらいの個人・団体によるネットワーク組織。集まるのは年 1 回のフォーラムのみ。それ以外はネットワーク上で意見交換を行う。大阪湾をこれから見守っていこう、海の底から見たいこう、ということで、大阪湾の職員がフェルトと帽子で手作りした“ハットヒラメ君”をかぶって説明。

1. 大阪湾ってどんなところ？

- ・大阪湾ってどんなところ？ 第一:危ない 第二:臭い 第三:汚い というイメージされることがほとんど。本当にそうなのか？そんな海なのか？
- ・弥生時代の大阪はほとんど海の中だった。今の USJ、梅田は海の中。大阪城は砂州に立っている。
- ・大和朝廷時代は朝廷の出先機関が出来た。大和朝廷に物資を運んだり、遣唐使、遣隋使などを派遣する重要な地に。
- ・江戸時代になると、北前航路の発達によりいろんなものが大阪に集まってくるように。
- ・明治時代は東洋のマンチェスタと呼ばれるように。海岸にいろんなものが出来て、台風の非常に大きな被害に合うように。
- ・戦後、埋立地が一気に増えていく。人工護岸ばかりで、自然海岸は 2%で、そのほとんどが河口。
- ・大阪湾に流れ込んでくる水は、びわ湖を筆頭にいろんなところからいろんなものが流れて来る。堺の例を紹介。大量のごみが漂着する。流入負荷量も多い。一日 100 トンを超える流入負荷量。
- ・浅場があった時代は浄化機能があったが、浅場を失い、浄化がなかなか進まず、大阪湾には栄養が貯まっていく。海底では貧酸素化が進み、夏には海底にムラサキガイが大量に落ち貧酸素の被害が拡大される。
- ・アンケートによると、海の景観が失われた、海水浴などのレクが出来なくなった、との意見が。目の前に海があるのに、近づけない。どんどん遠い存在に。

2. 大阪湾再生

- ・大阪湾で活躍されている中西 敬(たかし)さんによると、海の自助作用がなくなり、人間で言うと腎臓機能が落ちたメタボの海になってきている。何とかしないとイケない。
- ・2003 年から大阪湾再生活動が始まり、去年ちょうど 10 年目の節目を迎え、今年度は 11 年目。2 期目に入り、行政・民間が一緒になっていろんな活動をしている。見守りネットもこの活動の一環。

- ・大阪湾再生の取り組みにより、流入負荷量も激減した。海の栄養塩も下がってきている。赤潮も軽減してきている。しかし、海の中の COD は殆ど変わらず、漁獲量もどんどん減ってきている。
- ・大阪湾は、埋め立てで近畿圏内のごみを受け入れている。

3. 大阪湾見守りネットの活動

- ・大阪湾をもっともっと知ってもらわなければと活動をしている。近くて遠い大阪湾を、身近な海、大阪湾へ。行政の施策もあるが、みんなが変えようと思わないといけないし、みんなの行動次第。
- ・さまざまな活動：アマモ移植、観察会。カニカニウォッチ(スケッチ・観察)。スノーケリング、体験ダイビング(ダイビングスポットを作る)。チリモン、海藻おしば。ワカメの養殖など。
- ・イベントには同じような人たちが来ていた。海に興味があったり、潜在的に気持ちのある人。潜在的な気持ちのない人も巻き込むため、環境とまったく想像のつかない“音楽”コンサートとコラボしたイベントも行った。コンサート目当てで来る人に環境を知ってもらう取り組みを始めて 2 年。順調に参加者が増えている。
- ・大阪湾でも海苔養殖が行われている。海苔づくり+米づくり を自分で体験する取り組みを行っている。美味しく食べることで、陸と海は繋がっていることを伝える。自分の目の前の海で獲れた海苔を食べることの大切さを知ってもらい、循環をわかってもらうための活動。来年は体験漁業も組み合わせ、4 年後には“大阪産(もん)定食の完成を目指す。

4. 次の世代の子どもたちへ

- ・子どものブレーキをかけているのは実は大人。家庭、学校、社会 etc。ブレーキをかけるタイミングを考えることが必要。その時その時の判断。我々が今どう考えて子どもたちに教えられるか。その子どもたちが、自分が大人になった時に自分たちで判断してくれることが“次世代への継承”の正しい事と考えている。先のことを案ずるよりも、今やっていることや、どういう気持ちでやっているかを子どもたちに正しく伝える事が、私たち大人には必要。

■活動事例④ アカウミガメと美しい砂浜海岸を守る

プレゼンター: 渡邊 幸久さん あかばね塾 うらしま隊

1. ・街づくりの団体として、竹下登総理の「ふるさと創生事業」の 1 億円の利子の一部を原資に 1991 年発足。外部講師を招いて、生涯学習、勉強会を始めたのがはじまり。最初のメンバーが 30 名くらい。いろいろと活動の幅を増やして、楽しい事を拡大して実施。度々、三遊亭歌之介さんと呼んで、お寺で独演会を開く。
- ・渥美半島は農業が盛ん。それを育てている豊川用水。源流をせき止めて作ったダムから水を貰っている。水源地地域で活動している太鼓集団「志多ら」との交流で地元住民と太鼓クラブを創設。盆踊りも復活させる。
- ・未耕作地を花畑に。あかばね塾が先駆けて行った。渥美半島は今、菜の花がたくさん。

・地元で獲れる食材を使った「夜なべの会」でお世話になった講師陣のおもてなしで1年の締めくくり。

2. 各種会議の開催

・2000年、林正道(海洋楽者、魚のロボット製作者)さん、ジャック・モイヤー先生などをお呼びして世界海洋環境会議を開催。

・2008年、日本漂着物学会を誘致。赤羽根町の役場で開催。

・2010年、日本ウミガメ会議を開催。亀崎直樹日本ウミガメ学会会長が、ウミガメの原点である渥美半島でぜひ全国大会をということで、伊良湖のホテル、渥美文化会館で開いた。実行委員会をあかばね塾が担う。

3. ウミガメの保護活動

・1992年5月、浜松のNPO サンクチュアリジャパン 馬塚(まづか)丈司代表を招き、いろいろ教えて貰いながらウミガメの保護活動を開始。当初、ウミガメの産卵をどうしても見たいということで、徹夜で海に出た。地元の子どもたちとウミガメ産卵、子ガメの放流の観察会を始めた。

・赤羽根海岸は、ウミガメが産卵に上がってきてはいるが、当初は見る限りごみの山だった。伊勢湾水系、天竜川水系からペットボトルなど流れてくるゴミを片づける活動を始めた。孵化した子亀が海に行くときにも引っかかるので、ウミガメを守りたい一心で片づけ始めた。

・海岸には柵もなく、釣り人、観光客が海岸に車で乗り入っていた。4輪駆動車による深い轍が幾重にも重なり、親亀は乗り越えられるが子亀は乗り越えられない状態だった。杭を打ってロープを張って柵を作った。

・海外ボランティアから数年間外国人の青年を受け入れて、ウミガメ保護活動の援助をして貰った。ウミガメ保護のための啓発看板を作ったりした。

・毎年ゴミの種類を把握する目的で、国際ビーチコーミングを実施。

・名古屋港水族館と協働。調査、勉強会を実施。名古屋港水族館で生まれた子ガメを使い、地元小学校で観察会、放流会を行った。

4. 2014年の記録

・今年は例年より遅くなったが、5月から、8月まで産卵が続いた。赤羽根海岸で20頭ほど産卵があった。2013年より大幅な減少。

・今年の特徴として、無精卵が多かったことが挙げられる。夏の最盛期に産卵した卵が無精卵状態で発見されることは少ない。中を開けてみると、胚がなくて黄身が腐っている。オスガメの異常が懸念されるため、来年も続いたら対策を考えなければいけない。

5. ウミガメの食害問題

・最近の問題として野生動物による食害があげられる。ウミガメの卵は産んだあと砂をきちんと被せているので匂いが漏れないが、孵化が進んで卵が孵ったところになるとガスが出て、それが砂の上に出てくる

と、嗅覚の鋭い獣に穴を掘られて食べられる被害がここ数年増えた。加害獣を特定するため、1 か月間センサーカメラをつけて観察したところ、キツネが夜な夜な出てきて孵化したあとの巣の周りをうろうろしているのが映った。

・フラワーネットで保護したが破られたので、工事用のワイヤーネットを1メートル四方で被せ何本かの杭を縦に、巣を囲むように打ってなんとか防げている。

6. 海とのつながりを、次世代にも伝えたい

・殆ど 50 年くらい海のそばにしながら海と繋がっていなかった。「海で遊ぶな」という教育。大人も海にいかない。人と海を分断してしまうのはとても危険なこと。我々が行くことで、いろんなことがわかって対策もできる。これからも海と繋がって、出来れば次の世代に伝えていきたいと思う。

■ パネルディスカッション「子どもたちに美しい海を引き継ぐために」

司会：フォーラム後半、パネルディスカッションを始める。テーマは「子どもたちに美しい海を引き継ぐために」コーディネーターは CNAC 副代表理事の小池潔。パネラーは先ほど事例報告をいただいた 5 名。

1. 導入

小池：CNAC の小池です。お集まりいただき、貴重なお話をありがとうございます。今回 CNAC の全国フォーラムは 9 回目。これまでも幅広い分野から、海辺の自然体験活動を実践されている方から貴重な話を聞いてきている。今回も示唆に富んだ内容をお届けできると思う。昨年各地で活動されている方の代表に話を聞くということで、昨年度は横浜の事例を取り上げたが、殆ど人工の海岸線で、自然の海岸線を持たない横浜でも十分に自然体験学習の成果をあげているという示唆に富んだ事例をお届けできたと思う。今回は豊橋にお伺いし、三河ということで、三河湾を中心に、三河湾、大阪湾、伊勢湾の 3 つのエリアで活躍されている方にお話を聞いた。キーノートスピーチで鈴木所長から貴重なお話を聞いたが、三河湾を考えた時に、鈴木所長の話にもあったように、国内最大の自動車輸出入の拠点の三河港があり、その隣ではアサリが大量に増えているという話もあった。子どもたちに美しい海を残すということに関して、今まで再生のアプローチは素晴らしい自然をこれ以上悪くしない、という保全に取り組んでいた地域が多かったが、一歩踏み込んで、再生させる、より良くするという取り組みをされている。その中で体験活動を通して関心と理解を深めようと継続して取り組んでいる皆さんに今日話してもらった。

2. 次世代の子どもたちに美しい海を引き継ぐために

小池：今回の、美しい海を引き継ぐためにどうするか。鈴木先生のところは大人が考えるより、子ども達自身がこれからの海を守る活動だと思うが、17 年に亘る活動の経緯を。

鈴木：西の浜に関わった子どもたちが、西の浜の為に何ができるかということでいろいろな取り組みをしてきた。その中で子どもたちをずっと見てきて、ただ、浜が綺麗になっていくので良いわけだが、初めて海に来た子たちは波打ち際で遊ぶ。タコノマクラとかいろいろなものが浜にはあり、生き物を見つけて子

どもたちが楽しんでいるのを見ると、海の良さ、楽しさを伝えていけないと思ひ、体験活動を10年進めている。体験活動を通して子どもたちの話を聞くと、何故ここで美味しい魚を食べられるのか、きれいな海があるからと。塩づくりの会の時も、なぜ美味しい塩が出来るのかと聞くと、きれいな海があるからと答えてくれる。これらが今まで続けてきた成果と思っている。

小池：以前鈴木先生のところでスノーケリングのお手伝いをさせて貰った時、かつての教え子たちがブイなど準備をしていた。継続していることの効果を目の当たりにした。貴重なことを続けているのを実際に見た。

小池：自身で何かをやるというよりも、プロデューサー的な立場でいろんな人の特技を生かしていくという話があったが、そういう中で活動のコツ、流れを教えてください。

永田：コーディネーターとして一番大事なのは、自分が動くということ。海の活動ということで海だけではなく、気になったことはとにかく話を聞いてみる、声をかけてみるということを目指す。その場でこの人と思ったら交渉する。自分に力がないことは自覚しているので、助けていただくために声をかけさせていただくというのが一番のコツ。

小池：海の原体験とこういった活動を始められるきっかけを教えてください。

永田：最初の始まりは私の父が釣り師だったこと。仕事も釣りをするために辞めて独立したくらいの人で、殆ど海にいた。それを見てきた中で当然海に興味がわき、最初に就いた職がヨット関係だったが、ヨットのオーナーさんが大変な方で、貧乏極まりない船で、浜名湖に当時船があったが、セイルが破れたと言えは500円ずつみんなで集めてセイルを買うというオーナーだった。そのオーナーさんがみんなで小笠原に行くというので、当時24フィートという小さい船で、計器はコンパスしかついてない船で、半年間かけて行ったが、その時漁師さんたちに助けていただきながら、お仕事もさせていただきながら、海の人たちってなんて人たちなんだろう、というのが自分の原点と思う。

小池：永田さんはご自身でもヨットもSUPもやられて、アクセスディンギーにも取り組んでいらっしゃる。海が好きで何かに取り組んでいる方と言うのは自分でこつこつとやってきて自分自身だけで完結していることが多いと思うが、それがある日永田さんにその力を貸してくださいと言われたときに、自分だけの楽しみだけでやっていたことが、こんな風に喜んで貰えるんだと、力を引き出して貰えた方が喜びがあり素敵な活動と感ずる。

小池：村上さんは高度成長下、港湾計画の作成などに携わっていた方で、一時期戦後豊かさを目指して工業化にまい進した日本で、一つの象徴として三河港があって、今や日本の輸出入の大きな動きをしている中で、得たものも大きかったが一方失ったものの大きさへの反省が私たちの中であって、今後どうするかといった中で、人工干潟の実験、何か人工物をつくるに当たっても、海に思い入れや原体験があるかないかで違ってくる。そういった観点から人工干潟に関して一言。

村上：人工干潟は、三河湾に限定すると、姫島の基本設計を若い頃にさせてもらったことから始まって、昭和40年頃から、港の整備をするということが現在の日本の経済力に直結している。まず経済活動が良くなってきた。そうすると、海はどこへいったの、と。今日も話があったが、大阪湾、東京湾は自然海岸があまりない。伊勢湾は意外と三重県も愛知県知多半島も、また三河湾も、結構自然海岸はある。三大

湾の中で最も自然海岸が多い。埋立地は埋めやすい、浅くて、地盤が砂質で、安定しているところから埋め立てをして土地を作っていた。そうすると必然的に海岸がなくなる。どういうことになるかというと、私は伊勢湾で離島問題も少し関わってきたが、日間賀島、篠島、佐久島、鳥羽の方もそうだが、意外と波が多いところは自然の海岸が少ない。そこに砂を持ってきて巻きながら海水浴場は殆ど人工海浜が多い。中山水道の浚渫した砂を使って埋め立てをしながら人工海浜を作る。人工海浜の性質は、消波能力が、防波堤とか消波ブロックよりも、自然の海岸の方が波のエネルギーをぐっと吸収してくれる。そういう効果がある。藻場の場所にもなる。特に三河湾は非常に下に泥が結構たまっている。それをいかに裾紗するか。しかしこれも陸上の様にはいかない。砂を埋めてもその間からシルトが出てくるのでなかなか難しい。だけど、人工海浜は作って行かないとなかなか自然を元に戻すことができない。子どもたちに人工海浜を作って安心して遊べる場所の提供と、海の環境問題、人工海浜で一石三鳥くらいの効果があると私は思っているので、今後も推進していただいて、工業化の港湾から、自然と親しめる港湾にしていきたい。

小池：港湾の設備を整える作業は自然に負荷をかけるという意味で悪者になっていた部分があったと思うが、そうではなかったという話。干潟の浄化力が大きいという話もあり、人工の干潟を作って、そこで栄養塩を吸収して、海の復活に役立つということであれば、もしかしたら他に浄水場などを建設するよりも干潟を作った方がいろんな可能性があると感じた。

小池：大阪湾は河川からの流入負荷量がかなりあるという話があり、これらは総量規制で少なくなる可能性があると思うが、海自体の再生能力が合わせて必要で干潟を作っているというのもあると思うが、大阪湾はその辺りはどうか。

岩井：実は大阪は今大阪湾を真ん中で分けて奥と入り口でだいぶ状況が違う。湾奥の方は相変わらず栄養過多の状態が続いているが、湾の出口は栄養が逆に足りない状況。河から栄養が入ってくるが、それがだいぶ規制がかかって、一時期の入りすぎている状態は脱している。普通に考えれば、良いバランスになっている。今度は海の方の問題で海の中の流れが十分に起きていないということがあり、栄養が分散している問題を抱えているのが大阪湾の現状。河川の流入負荷量より、海の中でのことをもう少し考えて行った方が良い。短絡的に、栄養が足りないからもっと入れようという考えに行きがちだが、それが正しいか考えて、いろんな専門の先生方にご意見を伺いながら検討すべき。

小池：子ども達に美しい海を引き継ぐといっても、楽しさをどう伝えていくか。頭で考えるよりも、感動体験がないといけないと思う。その中で、ウミガメの産卵は見た人にとってかなりのインパクトだと思う。その辺りの反応はこれまで続けてきていかがか。

渡邊：最近も映像で、テレビで流れるが、実際にウミガメにあったとか、特に親亀が海から上がってきて産卵するのに大体2~3時間かかる。その間ずっと親亀と一緒にいると、今まで自分が人間として生きてきた体験をすべてちっぽけなものと言われている気がして、感動と言うよりも、神様の前で跪くような感じになる。それを子どもたちがどう感じるかわからなかったが、自分の子どもたちを連れていった時に、普段だと遊び出しちゃう。いろんな体験をさせようと思って連れて行くと。でも同じようにずっと跪いてじっと

見入っていた。今はお父さんになっているが、自分の体験したことは自分の子どもたちに伝えられるのかな、と。お父さんは実家の浜で見たんだよ、と。見たことをどう次に伝えるかというのは難しいと思うが体験があるのがないのかは違うので出来たらみんなに見せてあげたい。

小池: どういう経路で上がってきたか、考えたりするだけでも海に対してのロマンがある。それを体験してくれる子どもたちも生まれてくる。平成4年から20年続いている活動。

渡邊: ウミガメの活動は24年目

小池: 私たちもなるべく海での活動を、体験の場を何とか増やそうと CNAC も皆さんと連携して活動している。ウミガメが見られたり、マスクメロンが食べられたりしたら海に行きたくなる。

3. プログラム作りについて

小池: 実際に次世代に引き継ぐためのさまざまなプログラムを行っていると思うが、プログラムづくりの作り方、各団体で相互の取り組みでプログラムをやっていたりもすると思うが、連携を取ってやっているのか、何かネタがあるのか。工夫点を一言ずつ。

鈴木: 亀の子隊でやってきている海のプログラムは CNAC の皆さんのアイデアをいただきながら進めている。たとえば”タッチングプール”という言葉は唐津の第2回全国フォーラムで海辺づくり研究会の木村さんから聞いた。それなら渥美なら漁師の知り合いもいるしすぐ出来るねとやった。スノーケリングも、小池さんに渥美の海でも出来ると聞いて始めた。自分のやっているのは殆どここから。安全管理も CNAC がやっている安全管理をここでやってもらった。それまでは学校の行事の中での安全くらいしか考えてなかった。CNAC と関わって活動を進めていくときに、もう少し幅広く安全管理をしていかなければと意識して進めている。

小池: CNAC はノウハウの交流などを行っているのでぜひご利用いただければと思います。

永田: 非常に難しい質問。私自身が仕事として外食産業やスポーツ業界でマニュアルという言葉在日本に初めて持ち込んで第一線でやってきた人間なので、そういった意味ではシステムの構築が自分自身にマニュアルがあるので、海に置き換えて、題材をどうしようかと考えた時に、学校で大学には海洋大があるじゃないか、海上保安官になるためには保安学校があるじゃないか、と。そういう海のことを教えている学校のカリキュラムを調べていまシーレンジャーではそのカリキュラムを子ども用に落とし込んでいる。わかりやすいようにするためにはどうするか考えて。それを実際に単位取得制度でやらせている。

小池: 環境学習プログラムは様々なアイデアをお持ちの方がいてやられているが、真似しても怒られない。もしくは目的は一つということで許して貰っている？いろんなところから落とし込んでやられている。

村上: 伊勢湾フォーラムは敢えて子どもだけをターゲットにしてない。もっと伊勢湾全体を、三河湾を含めて、どうしていくかを考えている。その中で、名古屋市の生涯学習センターとか各関係のところ、こんなことを港の講習会をお願いしたいと、あるいは学習会を学生対象にやるから手伝って欲しいという依頼があって、いろいろなところに出て行って我々は活動している。

鳥羽を中心に、離島を巡るツアーを3年くらい続けてやった。インターネットで募集をかけたらすごい数が来て、9千回くらい開いた。かなり絞り込んでやった。大変な思いをした。7つの島があつてこれは東京湾

にも大阪湾にもなくて、伊勢湾にしかない。レインボープランとか、七福神とか。努力の結果、去年、伊勢神宮のご遷宮でクラブツーリズムが船を使って鳥羽の島めぐりをやった。私も日間賀島、篠島、佐久島のコースに行った。それで見ていると、今の大人は買い物ができないと文句を言う。一日ゆっくりと一晩泊まって朝昼寄ると楽しみ方をする事によって伊勢湾の良さが分かると思っているが今はみんな違う。買い物の感覚で、土産物屋がないなどと言う。子どもにとっても良くないと思う。

岩井: 基本は楽しそうなこと。楽しそうだということ、自分が楽しめなければ続けられない。とにかく楽しそうなネタがあれば試してみようかというところからスタートをする。その中で、**背伸びはするが、つま先立ち**はしない。身の丈にあった目標の範囲内でやることを心がけている。無理してやり続けても後々しんどくなるだけなので、無理をしない。自分たちができることから、伝えられることから伝えて行こうということ。**自分一人でやろうとしない**。いっぱいいろんな仲間がいるのでみんなで作っていきこうという考え方なので。こういうことやりたいと言った時に面白いねと言ってくれた人みんな中に入れてやってもらう。みんなが集まってきたら、**主役はみんな**という考え方。誰かが目立つとか、何かがあった時誰かが悪者と言うのではなくて、全員がみんなやって良かったと思ってもらえることで、次のアイデアが浮かんだり、自分そうやってみんなが楽しいと考えてくれれば、みんなが次の楽しいことを探してくれればネタが3倍5倍10倍と増えるのでそういう考え方でいまやっている。ただやりすぎると増えすぎて整理がつかなくなる。

小池: 24年間ウミガメをやってきてプログラムの変化は。

渡邊: 実はあかばね塾の活動が岩井さんと一緒だなと驚いた。我々もノープランで、皆が楽しいよということをどんどんやってきたのが24年間。ウミガメを続けてきたのは、みんなウミガメと関わって居たいから人が集まって来て、ウミガメのことならやれるよという気持ちで続けてきた。子どもたちに伝えなきゃと交流会ばかりを最初の頃はやっていましたが、最近学会の方からウミガメの放流は虐待だと言われて、我々はそういったことを子どもに伝えるために虐待するためにやっているわけではないのでそういうことは止めて、水族館で生まれた子をどっかで放流する時は赤羽根で、と約束をしながら、子どもたちに見せるのには子亀が一番なので、そういう風にやっている。

学術成果を得ながら修正しながら、楽しいことを目いっぱい、力いっぱいやっていこうと。

4. 引き継ぎたい海のイメージとは

小池: 関東からやってきて、三河のイメージの一つは伊良湖の辺り、柳田邦夫が、島崎藤村にヤシの実の話をして歌が出来たという話だとか、伊勢湾は伊勢湾台風だが、その前に神島の三島由記夫の潮騒のイメージ。非常に美しいイメージと、大都会のイメージが交錯している。

美しい海を子どもたちに引き継ぐためにというテーマでやっているが、管理的に連れていけないところがあるとか、最終的に皆さんが引き継ぎたい三河の海、この辺りの海のイメージについて。

鈴木: 実はあまり泳ぎが得意でない。自分たちの子どもの頃はまだ海に行っていたがあまり推奨される時代ではなかった。泳げる海まで距離もあって、子どもの頃の海のイメージがあまりない。亀の子隊と関わってから海を一生懸命見るようになった。十数年経って、改めて海を見たときに、海っていいなと思う。

何が良いかという具体的なことは出てこないが、見ていて飽きない、波の音で癒される、海からいただく食材の美味しさなどトータルにある海の良さを引き継いでいけたら、そのために海が綺麗でなければと思う。それを持っていきながら繋げていければと思う。

永田: こういった機会なので改めて話をしないと思うが、三河湾、伊勢湾は「美しい海」というのを止めようということで話が進んでいる。伊勢湾再生会議でも先ほど所長からご紹介あったが、豊潤な海ということで、美しいというと沖縄とかハワイの海のイメージ。三河湾が青いブルーの色になるかというとなるわけがない。昔から。本来の三河湾はどういうものかまずは正しく理解して貰おうということで、綺麗な美しい海岸と海岸線、それから海自体は豊潤な海、豊かな海であるよということを言い続けようということに今なっています。

私たちとしては、子どもたちに残そうとかそういう大層なことは正直考えていない。子どもたちと私たちが一緒に遊んでいろんなことをしていれば、その子どもたちがその子どもに伝えていく。そういった輪をどこかで区切ってしまったから今があるので、私たちがそのところを続けていけば良いのかなと思う。

小池: 美しいという言葉にもいろんな意味がある。見た目が綺麗とか、内面的に何か健気さが美しいとか。

村上: 私も三河湾含めた伊勢湾、子どもたちに夢を与えようと思ったら、何か。船に乗って海上交通を味わう。だんだんそれが難しくなっている。海に親しむのより、海の活用方法に大きな問題があると思う。中部国際空港作る時はいろいろな大きな夢があったがすべてダメになってしまった。私が伊勢湾フォーラムを作る時は自然と接する海と山、それと川、合言葉じゃないけど、山川海、その自然環境の循環性を子どもたちに自然に教えるためには自然の中に子どもたちを誘いながら、あるいは行きたいと言わせる何かがないといけない。これは大人社会の責任と思う。三河湾・伊勢湾含めて、わが国には自然災害の問題がある。3.11の津波でないが、自然災害の意識を子どもたちに自然と感ぜさせないといけない、非常に美しく恵があって感謝しないといけないが、同時に自然災害が起きたらこれほど怖いことはないんだよということを含めた総合的な海の理解を、何か機会があったら教えていかなければならないと思う。

岩井: 非常に難しい質問。すべてにおいてイメージと言うのは相対的なこと。その人にとってその海がどういうものかが大切。そこには正しい情報に基づいて自分がこういうイメージを持ったというのが重要。その一つの切り口として大阪湾の中では、大阪湾を豊かな海という言葉で、大阪では浪花という言葉で「魚の庭」という書き方を。そういう表現をするように昔から濁っているけれどもたくさん美味しいものが獲れたので。今子どもたちのお父さんお母さんに参加して貰っているのは、そういったものをまず知って貰って食べて貰って美味いって感じて貰った時に大阪湾のイメージがきつとその人の中に出るだろうと。それを今お父さんお母さんが考えてくれれば教育を受けていく子どもたちはそれに基づいて自分たちのイメージを作ってくれるだろうし、それが大きすぎてしまわないように、例えば三河湾でコバルトブルーの海が広がったらそれは死の海なのでそんなことがあっちゃいけない、そういうずれがないように順に引き継いでいければと考えている。

渡邊: 実際海の本当に数十メートル先に生まれてずっと住んで来て、子どもたちに引き継ぐ海ってそのものでしょと思うが、自分がやってきた 20 年ほどの間を思うと、子どもたちには少なくとも海にはいろんなものがある、いろんなものが獲れて、直に獲っていた時代もあるから、豊かな海が目の中にあることを知ってもらっていただければ問題ないと思う。僕たちは忘れないけど、子どもたちにはそれを改めて知っておいて欲しいというのがあって。それと、ニナイカナイという言葉があるが、竜宮城のような、海は夢に繋がるところだということを子どもたちには知っておいてもらいたい。ありのままの海がそのまま残ればそれで良い。それは僕らが感じたことで、次の世代は違った感覚で海を見るかもしれないが、それはそれで次の世代が海を大切に思ってくれればそれでいいと思う。

5. まとめ

小池: 今日はテーマに沿って、目的を達成するための道が 6 本ほど示された。

再生の中で、科学的な技術をもって再生していこうとする英知と、自身の時間を削って何年もの間継続されている活動をされている皆さんの話を聞くと、非常に敬意を持って受け止める。そうした科学的な技術と、何か理屈を度外視した海に対する皆さんの想いと行動力とプログラムの力と熱意の継続、それがうまくつながった時にさらに日本の海の環境に関して素晴らしい未来を提供してくれるのではないかという私の感想。ありがとうございました。

■閉会あいさつ CNAC 副代表理事 神保清司

私は初めてこの地域に来させていただいた。普段は千葉県で子どもたちの為に少年自然の家の施設の運営をしておりその中での海の活動との関わりから参加させていただいているが、感じたことは、地域ならではの海の特徴と活動の特徴があるということ。パネラーの皆さんの話を聞き、そこにある皆さん方の想い、そういう想いを聞かせて貰うと、今後の活動の活力、勇気、目標になる。印象的だったのは、皆さん楽しんでいること、そうでないと継続はできないこと。

最後に、CNAC がすべき役割は何かと考えたとき、こういう場をいかに持たせていただくか、今日のような話が聞ける場をどうやって開いていくか、その機会をどれくらい持つかが私たちのような全国組織の役割。

どんな活動もまずは安全が基本になるということで、海あそび安全講座の冊子をいろんな助成金をいただきながら印刷を続けていて、会員、会員でない方にも配布している。来年度も冊子として印刷していく予定。見てみたい方がいれば受付で見えていただいて。親子で海に出かける時、子どもたちが自分たちで海に出かける時に、子どもたちでも読んで楽しく海に触れ合えるための想いで作った冊子なので活用いただければと思う。

今後の CNAC との繋がりを。

(了)